

国語 解答一覧と配点案

大問	小問	正解	配点案	解 説
一 50 点	問一	① イ	2 点	一査 ア宣誓 イ査唱 ウ神聖 エ製本 オ要請
		② ア	2 点	浸（滲）透 ア透過 イ搭載 ウ踏破 エ陶醉 オ凍結
		③ オ	2 点	奮起 ア憤慨 イ粉（扮）飾 ウ紛糾 エ古墳 オ奮発
		④ オ	2 点	故郷 ア鼓舞 イ孤高 ウ回顧 エ枯（涸）渴 オ故意
		⑦ ウ	2 点	惨劇 ア賛（讃）辞 イ離散 ウ惨状 エ酸性 オ養蚕
	問二	⑤ ア	2 点	「敬」は“つつしみ敬う”、「虔」は“つつしむ”の意。
		⑥ オ	2 点	「軋」「轢」どちらも“こすれ合って音をたてる、きしる”の意。「軋轢」は、人と人との間で考え方などが合わず、争いや摩擦が生じていること。
	問三	ア	4 点	人間は言葉を使うが、「言葉と共同性というのは切っても切れない関係」があり、「その関係の中でわれわれは一人ひとり人間になってゆく」ため、個人であるよりも先に集合的存在であり、単独の人間は存在しない。よって、アが適切。イ「共同体の成立」に言葉が重要であるという内容と「個が集合的存在に統合される」という部分が不適。ウ・エは本文にない内容のため不適。
	問四	ウ	4 点	空欄補充は、空欄の前後の関係に注目する。Aの前の「一人ひとりが当たり前に個でありうるのは平時」という内容とAのあとの「戦だとなると、個は集団の要素になる」は対照的な内容なので、逆接の接続語「けれども」か「しかし」が入る。Bは、平時と非常時の違いを具体的に説明したことを踏まえて主張を述べているので、順接の接続語「そこで」が入る。Cの前の「勝った側だけの物語が残る」という内容に対して、Cのあとで補足する内容を説明しているので「ただ」が入る。Dは、戦のあとに生まれて残るものとして、空欄の前では「哀歌」を挙げ、空欄のあとでは「叙事詩」を挙げているので、「また」が入る。
	問五	エ	4 点	「創設神話」のもとになっているのは、傍線部（b）の前の段落に述べられているように、非常時に「人並み外れて優れた働き」をして神として崇められる英雄や功労者である。そうした神話によって「仲間意識や部族の誇り」を作り出して、「（英雄を）模範」に戦い、そして、「一人ひとりの死は集団の存続のための『犠牲』」と意味づけられることで、集団が固まっていく。よって、エが適切。アは「平時でも集団を存続させるための実践的行動を促す」、イは「個としての存在意義を自覚させる役割」、ウは「正しく記録して伝える」や「望ましい集団のあり方をそれぞれの合意のもとに行き渡らせ」という内容が不適。
	問六	右記参照	5 点	「それ」は崇拜の起源になるようなことを指している。非常時には集団全体が励起され「個を超えた力を発揮」する人が現れるが、そういう人はやがて「畏れられながらも讃嘆」されるようになる。こうした畏れや称賛の思いが崇拜の起源なので、この内容をまとめる。 〈解答例〉 非常時に集団全体のため個を超えた力を発揮した人が、畏れられながらも讃嘆されること。（41 字） 〈採点基準〉 1 「非常時に個を超えた力を発揮する」ということを述べていること。（2 点） ※「非常時」や「個を超えた力」は同じ表現であれば可。 2 「集団全体のため」ということを述べていること。（1 点） ※「集団が生き延びるため」など、同じ表現であれば可。 3 「畏れられる」「讃嘆される」ということが述べられていること。（2 点）

				※どちらか一方だけの場合は、1点減点。	
	問七	エ	2点	「滅亡」は、絶え滅びてなくなること。「興隆」は、興（おこ）して隆盛を迎えること。	
	問八	イ	4点	「人間はお互い基本的に殺さない」という「禁止」は「人間社会を成り立たせている」約束だが、非常時（戦争）においてはこの約束が解除され、「敵」は殺すことが推奨される存在となり「敵を倒した者が顕彰される」。このように、人間が人間社会を成立させる約束に反する状態になることを「人は半ば人間ではなくなる」と表現している。よって、イが適切。ア「道徳や倫理が崩壊して、人間が人としての感情を失う」が不適。ウは「敵」だけに限定している点が不適。エは「一人の人間として考えや感情を持つことが許可されなくなる」が不適。	
	問九	ウ	4点	空欄Eの前に「それ」とあるので、その前の「（戦争で）力の強いところが出てくると、それが広域を支配して帝国と呼ばれるもの」を作り、「その帝国秩序内では平和」になることを、「E」の全面化」と表現していることがわかる。平和である一方、支配的でもあるということなので、ウ「抑圧」が適切。	
	問十	エ	4点	「その世界」とは、全世界の人がキリスト教徒になり、その教えを守る世界である。筆者は、キリスト教や仏教の教えをもとに、生きている限り欲望や憎悪、災いがあり「平安はない」ということを述べている。また、「一人ひとり違って、それが大勢集まっているのが人間世界」であるため、生きることは「複雑なこと」だといっている。つまり、誰もが理想的なキリスト教徒である場合、生きている人間に付随している負の感情や人間の多様性が失われていることになるので、「死の国と同じ」になる。よって、エが適切。アは本文にない内容なので不適。イは「人びとの欲望や苦しみを権威が強制的に取り除き」、「現実には人間がみな暴力によって生命を落とすような状態である」が不適。ウは「大きな力を持つ存在が他人を強制的に従わせる」、「現実には矛盾に満ちていて存在するはずがない」が不適。	
	問十一	イ	5点	筆者は、本文最後の三つの段落で、人間の多様性によって生じる「軋轢」を避け緩和する手段として「社会の組織化」があると述べているが、「もしも」で始まる第十三段落や、続く十四段落にあるように、一人ひとりの人間は集団の中で生き、その集団的な暴力性は人間が生きる以上不可分であるため、戦争や争いは避けられない。一方で、「戦いは万物の生みの親」（第十段落）で、「結果的にさまざまなものを生み出す 垣塙（第十七段落）」となる。このことを「（戦争は）人間社会のリセットと展開の元」とであるとまとめている。よって、イが適切。ア「社会の組織化によって、統制されない個を集団に取りこんでいくことで人間社会はリセットされる」とは述べられていないので不適。ウ「リセットと展開」の意味を正確にとらえていないので不適。エ「人間は本質的に争いを回避して緩和しようとする欲求を持つ」、「激しい争いのあとは集団が社会によって組織化」されるという内容が不適。	
二 50点	問一	①	エ	2点	「没頭する」とは、他のことを顧みずに、一つのことに熱中すること。
		②	エ	2点	「疎い」は、親しくない、知識や理解が不十分だ。
		③	イ	2点	「コントラスト」は、対照、対比、明暗の差。
		④	ウ	2点	「窺う」は、こっそりと様子を探ろうとする。
	問二	右記参照		4点	「ぼくは音楽をかけないで暗室作業を行おうと心に決めている」の一文のあとに、その理由として、「ぼくも美駒ちゃんと同じように、音のない世界で写真を焼きたかったからだ。彼女と同じように視覚の世界にだけ向き合いたかった」とあるので、この二文をまとめる。 〈解答例〉

				美^{みこま}駒ちゃんと同じように音のない世界で写真を焼いて、視覚の世界にだけ向き合いたかったから。(44字) 〈採点基準〉 1「美駒ちゃんと同じように」という内容を述べていること。(1点) 2「音のない世界で写真を焼く」という内容を述べていること。(1点) 3「視覚の世界にだけ向き合う」という内容を述べていること。(2点) ※1～3とも内容が正しければ、表現は広く許容。
問三	ア	4点		空欄Aの前でコンゴウインコの翼の色について「鮮やかな赤」「濃い緑」「美しい水色」「濃い青」など四色もあることを述べている。この四色について、空欄Aのあとに「カラーフィルムで撮影したら映える」や「鮮やかな色合い」と述べていることから、「にぎやかな」と「きらびやかな」が合うとわかる。空欄Bの前後で、「ぼく」は「トンチンカンなことを言っていないだろうか」と心配していたが、美駒ちゃんが「うんうんとうなずいてくれた」ので、トンチンカンなことを言っていないと安心している。よって、「トンチンカンな」と似た意味である「的外れな」が入る。これらからアが適切。
問四	ア	4点		「ぼく」は、色がないことではっきりとわかる「翼の作りの繊細さや、羽根や^{くちばし}嘴の光沢」、「賢者のような顔つき」に「インコを彩る鮮やかな色合いに目を奪われて気づけなかった」ことで、「色は強い」と感じている。よって、アが適切。イは本文とは反対の内容なので不適。ウ「色ばかりが鮮やかに思い浮かんで」は本文にない内容なので不適。エ「その色が細かな構造や表情を覆い隠すような仕組みになって」が不適。見る側（「ぼく」）の視線が色の方に向くことが理由であり、そのものの仕組みについて述べているのではない。
問五	ウ・オ (順不同)	各3点		プリントされたコンゴウインコの写真について「モノクロ写真になって色がなくなってみると、色による視覚的な強さは失われて」、「凡庸な写真となった」ことを、「ぼく」は「難しい」と感じている。また、傍線部(c)のあとの部分から、「ぼく」は経験の蓄積がない写真そのものに難しさを感じている。これに該当するのはウ。また、「ぼく」は「撮影時にモノクロになったでし上がりの状態を想像して撮らなかった」ことを「悔しい」と感じている。これに該当するのはオ。アは「色の違いのはっきりしない」や「モノクロ写真」などに限定している点が不適。イ「被写体の強さではなく撮影者の使う機材の質」と感じている部分はないので不適。エ「フィルムカメラの性質」ではなく、そのことを考えてでし上がりを想像しなかった自分を悔しく感じているので不適。
問六	エ	4点		傍線部(d)のあとの、「ぼく」が文章と写真についてホワイトボードに書いて述べている内容と、「文章による表現は、連続する視覚世界のひとつひとつに言葉という名を与えることで切り分け、意味を持たせ、……再現する」、「写真は……フレーミングとタイミングで切り取ってきて、……再現する。……言葉なんかなくたって世界はそこに存在する」というまとめに合うのは、エ。ア「出会いや主観で対象に意味を与えて再現する」、「対象の感情や雰囲気までもとらえるためすべての存在が認識される」が不適。イ「具体性を重視して」、「世界にある意味を取り除く」が不適。ウ「知識を積み重ねていくことが重要」が不適。
問七	イ	4点		美駒ちゃんは、「ぼく」の「写真はぼくが幼いころから教えこまれたことと、まったく逆」という言葉に、「首を傾げた」が、傍線部(e)では、「ぼく」の説明の中で「言葉ありき」という部分を抽出してつぶやいている。このあと、美駒ちゃんに「ぼく」の考えが伝わったことが読み取れるので、傍線部(e)は彼女が理解してはじめて、大切な部分をつぶやいていると考えられる。よって、イが適切。ア「カメラマンには疑問が残る」、「ウ」「幼いころの話を聞いて納得できた」、「『ぼく』の心情に寄り添おうとしている」、「エ「不安だった」、「あまりに意

				外で」が不適。
	問八	イ	4点	空欄Cの前では、「同じ世界を反対側から見ていた」という「美駒ちゃん」の「言い回しに感心した」とあるので、空欄Cでは「写真という言葉が介在しない表現に従事」していても、言葉による表現が上手だということをいっていると考えられる。よって、イが適切。
	問九	ウ	4点	美駒ちゃんが、「世界をどこまでも言葉で表していこうとする人と、どこまでも言葉から離れていこうとするけど世界の存在を示そうとする人」という表現で、文章を書く人と写真を撮る人の世界に対する向き合い方の違いを比較したうえで、文章の世界で育った「ぼく」が写真で表現することで「違う領域までたどり着ける」といっていることから考えると、ウが適切。ア「言葉から離れることなく」、イ「言葉から離れることの難しさを経験している『ぼく』は、そうした感情によって世界を表現する」、エ「文章表現がこれまでにない深いものになるかもしれない」が不適。
	問十	エ	4点	「ぼく」は美駒ちゃんから「違う領域までたどり着ける」と言われたときは「照れた」が、「期待しているよ」と言われたときは「胸は高鳴った」。ここには、家族から期待されず、「ぼく自身も期待しなくなっていた」のに、期待されたことで救われて少し自信や意欲がわいてくる思いが読み取れる。よって、エが適切。ア「美駒ちゃんの期待に応じて結果を出したい」、イ「好意的な言葉を少し重荷に感じた」、「美駒ちゃんの思いに真面目に向き合わなかったことを反省する」、ウ「緊張しながらも今までにないほど写真に対する意欲が高まり」が不適。
	問十一	イ	4点	ア「ぱっと明かりが灯 ^{とも} ったように感じられる」は、「ぼく」が美駒ちゃんをどう感じているかという心情や関係性が読み取れる表現で合っているが、後半のホワイトボードや暗室を対比するような表現はないので、不適。イ「せせせと」は美駒ちゃんが作業に熱中する様子を示し、「うんうんと」は美駒ちゃんが「ぼく」の考えを理解したことを伝える様子で、美駒ちゃんの人がらなどが感じ取れる描写である。また、「首を傾げた」「腕組みをして」のほかにも、「ぼくに微笑 ^{ほほえ} みを向けて」などの描写を重ねることで、視点である「ぼく」以外に美駒ちゃんの心情が伝わるようにしている。よって、これは適切。ウ「色は強い。印象においても、視覚情報においても」など倒置法などの表現はあるが、色の強さに対する考えの描写で第三者の視点による客観的表現が多用されている部分はない。文章最後の「心をこめて礼を言った。一音一音に心をこめて」は「心をこめて」を反復して、その後を省略するような表現で、「ぼく」の心情表現に余韻を与えているので、こちらは合っている。エ一貫して「ぼく」の視点を通して描写されており、「別の登場人物の視点を部分的に挿入する」部分はない。「ぼく」が文章で育ったことを美駒ちゃんに伝えて、表現に対する考え方を掘り下げており、この部分は合っている。